北の鉄道風景

Train number; 3887M/回130
2022.3.9 15:10
1/320, f/8, ISO 400, f=86mm, Daylight/Sunny
5504×8256 Raw

第120回

卒業写真

校長や理事長が卒業式で何を喋ったか、思い出すのは至難の業である。式が終わって三十分もすれば記憶から消える。たまに、一生覚えている、といった話を聞くが、それは、宝くじに当たったほどのことと言える。

では、私が祝辞や訓示をたれたらどうなるか。落語の独演会まがいの代物になって、卒業式の荘厳さを壊された学校側が渋い顔をする。親たちからも、こんなところに高い学費で通わせていたのかと、ため息が漏れる。着物が苦しいと泣きながら笑い転げているのは学生だけで、卒業式で壇上に立つなどという役回りはいつの間にか回ってこなくなった。

すっかり社会人になった学生と十年ぶりに会ったりすると、卒業式は楽しかった、と笑顔で言うので、それ見たことか、笑いの中に高邁（こうまい）な信条を包み込んだ祝辞こそ心に残るものなのだ、と我が意を得たりとばかりに話が弾むのだが、心に残ったのは笑いのネタだけで、私が言わんとしたことは、何も伝わっていなかったことが判明するというオチまでついてきた。

DD14による機械除雪ほど豪快なものはなかった。若者はそんな姿に憧れる。私もそうだった。函館本線　1984

写真と文＝眞船直樹

しかし、旅立つ彼らになにかしてやらねばという強い使命感から、写真を撮ってあげようと持ちかけた。特に女子学生は、魅力的に写るはずだと根拠もなく信じて喜んでくれる。されど卒業式である。きれいな写真を残すだけではなく、教育者として卒業というものを体現した写真を残したい、という高尚な教育理念も私を突き動かしてやまない。

卒業式の会場から札幌駅は近かった。式が終了したのが、午後二時半すぎ。私は心のなかで小さく叫び、私と波長の合う学生を連れ出して入場券を買い、ホームに立たせた。

「あそこに奇妙な列車がいる。君らの人生は、あの列車みたいなものだ。どんな苦難が待ち受けようとも、道を開き、乗り越えて行け！」

出発ブザーが鳴った。

「函本上り、出発進行。発車！」

華やいだ若い声が教えたばかりのセリフを叫ぶのと同時に、DE15のホイッスルが早春の空に響いた。

あの日の記念入場券は卒業証書にまだ挟んだままだろうか。 Ⓙ